家族と私
――家族の絆――

グループ H　蘭旺（ランオウ）

1．紹介文

私の家族には両親、姉と妹がいる。私にとって、大切なコミュニティはそこにあると思う。

私の性格はちょっと内向的である。知らない人と付き合うのは恥ずかしいと思う。その余裕はない。そして話すのも下手である。家族ならその恥ずかしさがない。話し方もそれほど注意しなくてもいい。

私自分一人で寂しいとき、まず思い出すのは家族である。何か話したいことがなくて、ただ家族たちの声がききたい、ずっと家を出て、家族たちと離れて、遠くにいるからだ。姉とか、妹とか、近ごろはどうだったかを知りたい。自分が何も言わなくてもかまわない、ただ聞くだけ。話題も必死に思い出さなくてもいい。そして、いつでも連絡できる。

また、両親との電話には家の暖かさが感じられる。「だんだん寒くなるから、服を注意してね。」と両親に言われる。時には、聞きたくなくても、その話の中の家の感じに感動される。

これは私の大切のコミュニティである。

２．取材散歩

さきの二週は、うちのグループ四人が一緒に教育文化学部 1 号館２階のラウンジに行った。

皆は親友たちの写真を互いに見せた。そして、その人との楽しかったことを話した。ジョンさんの F４、菊地さんの RevivaL、リンダさんのほかの国の友だち、そして私の父親。

ジョンさんの四人グループの友情に非常に感動した。今、四人は別々のところにいるが、友情は相変わらずそれほど深い。とても感心した。菊地さんと友だちはいっしょにダンス練習して、互いに励まし合って、一緒に上達することを聞いて、自分はそういうともたちがほしいなって思っている。リンダさんはほかの国の友だちと一緒に料理を作る写真を見せてくれた。写真の中のリンダさんは笑顔である。その笑顔からリンダさんの真心が見える。

皆は今の所属あるいは過去の所属を話した。人間には社会性があるので。人々は所属の感じのために、必ず、何かの集団の属したい。そして、その集団の中で、自分の楽しみと心がある。

３．話し合いの相手

うちの父は無口の人である。いつもあまり話していない。厳粛の顔で、何かを思っている様子である。しかし、家族みんなは彼がこの家を黙々と支えているのを知っている。父は、母と一緒に、私たち三人の子供を大学と大学院に入らせた。これは父と母の光栄だ。そして、父は無言で私たちを愛している。

高校のとき、、学校に住んでいたので、月一回帰られる。毎回帰って、家にいたとき、普段めったに料理を作らない父はキッチンでおいしい料理を作ってくれた。大学のときもそうである。夏休みと冬休みのとき、姉、妹と私、家に帰って、家族団欒のころ、父は必ずキッチンに行って、母にも感心されるほどのおいしい料理を作ってくれる。

これは父と私たちとの一つのコミュニケーションである。言葉が少ないが、感情に溢れている。

４．話し合いの結果

先週の日曜日、父に skype で電話をかけた。インタビューをしようと言ったら、父は「ははは一」と恥ずかしくて笑った。こういう正式な話は以前なかったからだ。でも、自分は普通のことばに変えて、話を続けた。

話の内容は以下のようだ。父の話はとても地味で、私ちょっとその意味を取って整理した。

「今まで自慢な事は何か。」

「自慢な事は三人の子供は皆大学には入った。特に、息子は日本に留学した、君の姉は大学院にも入った。三人の子供はみな優秀なのだ。これは最も自慢なことだ。」

「家族のために、何か近い計画あるか。」

「まず、新しいそしてもっと大きい家を建てることだ。今の家は古いし、もう二十数年ぐらいかな、お前たちはもう大人になった、今後、家に帰ったとき、狭く、不便になった。だから、最も重要なのは新しい家を建てるのだ。」

「これからの期待すことは何か。」

「お前たちに出世してもらいたい。これこそ私が期待していることだ。必ずがんばるよ、お前たち。お前たち三人は家の未来、そして父と母の未来だ。」

その他、父は老後のときの光景を想像した。広い部屋で、三人の子供と子供の子供、家族みんな揃って、それはどれほどにぎやかな光景だな。ずっと待ってるよ、その光景。

父はもうとても疲れた。家族のために、父は自分の全ての心血を注いだ。だから、父は他の人一般の人であると同時に、偉大な人であると思う。

5 家族と私

私の家族は私に生命を与えた。そして私を育った。そこには、私の思い出、私の心、私の全てがある。

父と母は自分を赤ん坊から今まで、辛苦をいとわないで、育ってきた。病気のとき、病院に連れてたり、そして時間どうりに薬を飲むことを自分に注意しているのだ。何の文句も言わない。冬になったら、「服をもっと着てね。かぜをひかなでね。」ってよく言われる。返事はよく「わかったよ。」、特に、中学校のときもっとひどい「うるさいよ！」である。親はいつも黙々と聞いていた。

そこには、自分を理解する親、姉と妹がいる。自分はどんな悪いことにあっても、どんな不愉快なことにあっても、家族たちはずっと私を支えているのだ。自分は何かいいことがあったら、家族たちは真心で祝うことばを言ってくれる。そして自分の喜びを分かち合う。また、悪いことがあっても、家族に心を打ち明けられる。家族も真心で自分を慰める。

今後、姉と妹と一緒に力を合わせて、家のために、尽力すべきだ。これからは、家族をもっと大切にしなければならない。特に、息子として、この家を支える責任を早く負わなければならないと思う。

６コミュニティとコミュニケーション

この授業のおかげで、自分は父とちゃんと話す機会があった。この前は正式的に交流することはなかった。自分はずっと愛されているままで、親の愛を受けていた。父との会話を通して、自分はコミュニティへの理解は以前より深くなった。

各コミュニティにはその感情がある。その感情は愛だと思う。コミュニティによって、その愛の内容は違う。その愛はコミュニティの中の各メンバーから出したものだと思う。もし、皆はそのコミュニティから愛を受けるだけ、自分から出さないと、だんだん、コミュニティの命はなくなる。だから、コミュニティはみんなの感情の港あるいは工場である。みんなの心から愛を受けて、この愛を加工して、拡大してから、みんなに輸出する。

家族もそういうことである。愛のない家族は家族とは言えない。親は自分の方式で子供を愛して、守っている。子供も息子あるいは娘として親たちに自分の愛を出すべきだ。

コミュニケーションにもいろいろな感情（喜怒哀楽）がある。コミュニケーションを通して、他の人に自分を理解してもらって、他人を理解する。コミュニケーションは自分とこの世界とのやりとりである。このやりとりの過程の中で、自分を表して、世界を分かるようになる。

これは、私自分の「コミュニティ」と「コミュニケーション」への理解である。

７クラスについての感想

このクラスに自分は感謝の気持ちを持っている。ずっとそう思っている。なぜだというと、いくつかの理由がある。

まずは、日本人だけでなく、世界各国の友だちが出来た。そして、いろいろな国のいろいろなことが分かった。特に、グループの人のコミュニティの話しを聞いて、とても感心した。

また、父との会話であった。この授業は自分にいい機会がくれた。父との会話は自分にとってたいへん重要だ。父の愛はもっと分かるようになった。自分は彼からもっと家族たちを理解すべき、もっと心を出すべきだ。